

メキシコ・先スペイン期遺跡の一般公開におけるノンパーソナル・インタープリテーションの有効性および問題点

渡辺 裕木（筑波大学大学院）

キーワード：考古学遺産の活用、保存修復、多様性、遺跡の一般公開（展示）

報告要旨

私は1995年から2015年までメキシコに在住し、現地の大学在学中および卒業後、保存修復士として文化遺産の保存修復に携わった。本発表では、現場経験を通して認識するに至った、メキシコ文化遺産の活用—特に先スペイン期の考古学遺産の展示—における課題と、今後の研究の展望をまとめた。

保存修復の方法や作業に使用する材料は、遺産の素材や保存状態、保存される環境、予定された活用方法等により決定される。遺産が遺跡や博物館等で展示され一般公開される場合は、展示の目的や状況も把握すべきであるが、見学者の理解促進を目的として施される形状や色彩の修復は、偽造行為に繋がる危険を含むため、現在は最小限の「変形」とどめる方針が多くの場合推奨される。このため、見学者の理解を助ける為に、展示や解説の技術の向上がより重要になるが、メキシコにおいては、先スペイン期の遺跡の一般公開の技術に関する先行研究は豊富ではない。

一般公開される考古学遺産の修復方法選択におけるクライテリアの充実を目的として、修士課程では博物館学を専攻し、メキシコの遺跡で最も一般的な解説ツールであるパネルによる解説を「ノンパーソナル・インタープリテーション（人的な解説行為を行わないインタープリテーション）」と位置付け、パネルの利用状況の分析を、利用者へのアンケート調査等を通して試みた。その結果、パネルの利用者であるメキシコ国民が、遺跡や遺構に対して持つ特定の印象が、遺跡見学および遺跡・遺構の理解における先入観となっている事に気づいた。また、遺跡の解説技術を改善する為には、解説ツールの利用者が先スペイン期の文化やその遺物に対して抱くイメージを理解することが望ましいと考えるに至った。

現在のメキシコにおいて、国民が考古学遺産に抱く印象は、先スペイン期文化やその遺産が、国家統合のイデオロギー確立を目指した近現代の施政者によって、国を象徴するものとして紹介されてきた歴史的経緯に要因があると考えられる。メキシコ国民が考古学遺産に関する知識を得て特定の印象を抱くに至る経緯には1)義務教育による遺産の紹介と、2)考古学遺跡や博物館における遺物や遺構の展示が影響すると仮定した。今後の研究では、A)20世紀以降のメキシコの歴史教育で使われた教科書等における考古学遺産表現の変遷の整理、B)遺跡や遺物の復元、修復および活用の実態調査、C)AおよびBに影響を与えた可能性のある社会的政治的背景や、歴代為政者の意図の分析を通し、考古学遺産と国民のアイデンティティ形成との関連を考察して行きたいと考えている。

[主要参考文献]

Gallardo Parrodi, María de Lourdes Graciela

2005 *Un análisis histórico-museológico del Museo del Templo Mayor*. Tesis de maestría. Instituto Nacional de Antropología e Histórica- Escuela Nacional de Conservación, Restauración y Museografía, México.

Gándara Vázquez, Manuel

2001 *Aspectos sociales de la interfaz con el usuario: una aplicación a museos*. Tesis doctoral en Diseño y Nuevas Tecnologías. Universidad Autónoma de Metropolitana. Unidad Xochimilco, México.

Ham, H. Sam.

1992 *Environmental Interpretation. A practical guide for people with big ideas and small budgets*. North American Press, Colorado.